

平成 26 年 4 月 26 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520205

研究課題名(和文) 1968年以降の現代文学とサブカルチャーの相互交渉と再編に関する総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive study on mutual negotiations and restructuring of contemporary literature and subculture since 1968

研究代表者

押野 武志(Oshino, Takeshi)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：70270030

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：今日の文学研究・文化研究の問題点を近代批判の文脈から68年の思想まで遡り整理した上で、68年代以降今日に至る現代日本文学とサブカルチャー、あるいは活字メディアと視覚メディアの錯綜した交渉関係を、村上春樹の登場とその受容史という縦軸を中心に同時代の文化・メディア環境も視野に納めながら具体的な相において通史的に明らかにした。このようなジャンル横断的な新たな現代日本文学史を構築するためには、これまでの方法論や文学理論では捉えきれないという観点から、デジタル化社会に応じた、新たな分析概念及び文学理論の再構築も同時に目指した。

研究成果の概要(英文)：We arranged the problems of today's literary studies going back until 1968. And we clarified the complicated negotiations between modern Japanese literature and subculture, or the print media and the visual media. Particularly, we followed the change of reception and the evaluation of Haruki Murakami.

We were not arrested by the past methodology and literature theory to build such a cross-sectional new modern Japanese history of literature. Therefore we aimed at a new analysis concept and the rebuilding of the literary theory corresponding to the digital society.

研究分野：日本文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：メディアミックス サブカルチャー 日本近代文学 村上春樹

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者は、平成 20 年から 22 年度にわたって文科省科学研究費補助金(基盤研究C)を得て、研究課題「1960 年代日本における文学概念の変容についての総合的研究」に従事した。本共同研究の目的は、日本の 1960 年代において、社会的・思想的・政治的な諸言説が重層的・多元的に干渉し合いながら、文学概念の編成と再編がどのように行われたのかを究明することにあった。純文学/大衆文学、カルチャー/サブカルチャー、文学/政治、事実/虚構といった 60 年代の文学をめぐる新たな線引きと錯綜した諸言説をさまざまな領域から横断的に分析することで、1960 年代の文学をめぐる歴史的な特質を総合的に明らかにした。

(2) そのようなこれまでの研究成果を継続し発展させるため、68 年のポストモダニズムの思想を再検討し、それ以降の多角的で通史的な文学・文化研究を目指すことで、今日の書物や読書概念の変容の諸条件も解明されるのではと考えた。68 年の思想とその問題性が具体的に現れるのは 70 年代であり、文学とサブカルチャーが分かちがたく結びつくのもこの時期である。戦後のサブカルチャーは、アメリカの政治や文化の影を引きずりながらも次第に日本化し、それが文学の領域にも流入することとなる。その意味で、79 年の村上春樹の登場(その前史としての庄司薫の登場)はひとつのメルクマールとなる。それ以降、次々と発表された村上春樹の小説の特質は、ミステリ・SF・映画・音楽等、多様なジャンルからの引用を多用し、80 年代のポストモダンの思想とも論争的に関わることとなる。さらに今日に至るまで村上春樹の作品構造の特質は、文学の枠を超えさまざまなジャンルで受容・消費されている。

(3) 村上春樹研究は膨大にあるものの個別作家研究に留まる傾向がある。アメリカ文学・文化の影響などは指摘されてはいるが、逆にサブカルチャーとしての村上春樹がどのように受容され、多様なサブカルチャーの領域とどのように関連しているかについては、十分に研究がなされているとは言いがたい。

2. 研究の目的

(1) 今日の文学研究・文化研究の問題点を近代批判の文脈から 68 年の思想まで遡り整理した上で、68 年代以降今日に至る現代日本文学とサブカルチャー、あるいは活字メディアと視覚メディアの錯綜した交渉関係を、村上春樹の登場とその受容史という縦軸を中心に同時代の文化・メディア環境も視野に納めながら具体的な相において通史的に明らかにする。

(2) このようなジャンル横断的な新たな現代日本文学史を構築するためには、これまで

の方法論や文学理論では捉えきれないという反省のもとに、デジタル化社会に応じた、新たな分析概念及び文学理論の再構築も同時に目指した。

3. 研究の方法

(1) 共同研究者は、文学とサブカルチャーの通史的な展開と共時的な個別具体的な事象の分析を通じた理論構築という二つの座標軸に基づいた方法論を共有する。その上で、共同研究の特性を活かした有機的で総合的な研究となるために、役割分担を明確にする。押野武志は、研究を統括する立場から、70 年代から 80 年代を集中的に扱い、宮沢賢治・村上春樹と続く文学者のサブカルチャーの想像力の系譜を辿りつつ、ミステリというジャンルを中心に批評理論の再検討を目指す。千田洋幸と西田谷洋は、80 年代から 90 年代を集中的に扱いながら、アニメ批評を通して、村上春樹研究及び受容の問題を取り上げ、本研究の史的研究を通じた批評理論を再構築する。横濱雄二と竹本寛秋は、2000 年代以降の文学とサブカルチャーを取り巻くメディア・テクノロジー環境に着目し、主として分析概念の理論構築を目指す。

(2) 研究代表者及び研究分担者のそれぞれの具体的な研究の方法は以下の通りである。

押野武志は、これまでのサブカルチャーや 1968 年の思想家たちによる宮沢賢治受容の特質をめぐる研究成果を踏まえ、その射程をさらに村上春樹受容の諸問題にまで敷衍する。70 年代の村上春樹は、サブカルチャーをどのように受容しながら従来の日本文学を相対化しようとしたのか、あるいは村上春樹的な書法がいかにサブカルチャーに逆流していったのかを、80 年代のポストモダニズムを再検討しながら明らかにする。村上春樹は三作目の「羊をめぐる冒険」から、ハードボイルドやミステリの物語形式を意識的に援用するようになる。押野は、これまでの純文学とミステリをはじめとするサブカルチャーとの相互葛藤的な関係性をめぐる研究成果も踏まえ、大衆的な人気を博しながらも、柄谷行人をはじめとするポストモダニストたちになぜ批判されなければならなかったのかという歴史的な文脈も掘り起こす。

千田洋幸は、1980 年代に進行した近代文学の位置の変動と、現代思想・文学理論の言説の台頭を視野に入れながら、この時期に顕在化しはじめた多様な文化ジャンル相互の交渉と葛藤について、その焦点となる存在である村上春樹の受容 = 消費の様態を軸に検討する。また、この時期を代表するアニメ作家である宮崎駿、富野由悠季(喜幸)、押井守らの思想に関して、戦争の記憶、身体の変容、ループ/反ループ、少女/少年といった概念を用いながら考察し、それぞれの歴史的・社

会的コンテキストにおける位相と、現代文学との交渉のあり様について解明する。その際、大塚英志のキャラクター理論、東浩紀のデータベース理論、伊藤剛のキャラ/キャラクター論、斎藤環の「心理学化社会」論等の有効性についても検証し、ポストモダン文化を語るための新たな理論の構築を目指す。

西田谷洋は、アニメ研究と村上春樹研究とを同等の理論装置を使い、現代思想でテキストを読むと共にテキストを読むことで理論装置を再検討する。制度と変革の機構・実践とテキスト分析とを接続する作業を通して、東浩紀らのポピュラーカルチャー研究の論理構造の欠陥やそれが捉えられないイデオロギーを可視化し、新たな理論の臨界への到達を目指す。さらに村上春樹テキストの受容という観点から、ジェンダー・受動性・メタフィクションといった問題系を導き出し、表象の危機と想像が直接接続する論点も提出する。東氏らの分析の多くが男性の主体化の物語を対象としていることを問題化し、女性原作者のテキストとして男性の主体化にのみ奉仕しないアニメの可能性を探り、サブキャラクターを男性的価値観のクローゼットを形成すると共に解体しうる装置として捉える作業も行う。

横濱雄二は、2000年代以降のサブカルチャーにおけるメディアミックスを具体的に検証するとともに、横濱のこれまでの研究で導出された理論装置のさらなる深化を図る。大塚英志らの構造主義的なサブカルチャー分析を批判的に検討しつつ、従来のサブカルチャー研究ではほとんど顧みられることのなかった研究、特に英米の分析哲学を基盤とするマリー＝ロール・ライアンらの物語理論、リック・ハルトマンやスティーブ・ニールらの映画ジャンル論、メアリ・アン・ドーンらの映画の表象分析など映画学の成果も広く参照し、諸メディアを通底する理論装置を構築する。同時にそれらを文学作品、映画、アニメ、マンガなどのメディアミックスの分析に用いて、適用可能性を探るとともに、「本格ミステリ」や「セカイ系」などのジャンルごとに細分化している日本のサブカルチャー批評を相対化し、それらのジャンルを通底する視座の獲得を目指す。

竹本寛秋は、これまでのネットワーク技術研究と、場における共有概念の変容を分析する手法を用い、ネットワーク技術の変遷がいかにメディア環境を変容させたかを検討する。1995年以降のネットワーク技術の変化を通時的に押さえた上で、テクノロジーの変容が文学・サブカルチャーにおける作者・享受者の関係性をどのように変化させていったかを分析する。ネットワーク技術の変遷の分析は、ネットワーク技術が可能にした想像力の問題の面からだけではなく、ネットワーク

技術の実現を可能にした想像力の問題の両面から行う必要がある。同時に、文学・サブカルチャーのテキスト分析を行い、テクノロジーの痕跡をテキストから読み解く作業を行なう。さらに、情報環境の変化による作者・享受者の関係性の変容を、Amazonレビューに象徴されるような、瞬間的・即時的に発動し、可視化される評価関係の場の分析を軸として明らかにする。

4. 研究成果

(1) 本共同研究のメンバーは、既に本共同研究の課題と通底する研究業績をそれぞれ発表している。各論を統合的な研究にすべく、方法論・分析概念の理論構築を目指しながら、活字メディアと視覚メディア双方を包括する新たなメディア論的文学史記述への展望を開いた。95年以降のネット社会・デジタル化時代における知覚と書物の変容という状況下において、文学も大きく変容を迫られるわけだが、その変容の具体的な相を、村上春樹の受容のされ方を通して明らかにした。サブカルチャー批評において一般化する大塚英志や東浩紀らのリアリズム論、宮台真司らの社会学的分析方法、斎藤環らの精神分析学的方法の限界と問題点を改めて68年の思想とつぎ合わせ再検討し、デジタル化時代における新しい文学史と文学理論を構築した。68年以降今日に至る文学とサブカルチャーの相互交渉史を段階的に新しい方法論によって分析すると同時に、村上春樹作品の構造分析とその受容史をそこに交錯させることによって、明確なパースペクティブからの新しい文学史記述が可能となった。

(2) 村上春樹をはじめとする文学研究を基軸に据えた文化研究と研究対象の脱領域性（ミステリ・SF・ライトノベル・ケータイ小説・映画・アニメ・マンガ・ゲーム...）が特色であり、1968年から現代までを視野に入れた巨視的で通史的な研究となった。これによって、具体的事象を通じた文学研究と文学概念の変容との相即的關係も究明された。

(3) 文学と他ジャンルとの影響関係・相互関係についての従来の研究は、文学と映画、文学とアニメというような、限定的で個別的な関係性の分析がほとんどであった。本共同研究は、サブカルチャーの多様性と文学との複雑な関係性に鑑み、共同研究者がこれまでの研究成果を踏まえ、それぞれの役割を分担しサブカルチャーの多様な領域を研究対象とすることで、文学研究を基盤に、複数の領域を共時的かつ通時的に分析することが可能になった。これまでの文学研究の蓄積を応用しつつも、文学研究の対象を同じ方法を用いて単に広げるだけでなく、ジャンルやメディアの特性をも明らかにするメディア研究として意義があった。

(4) 具体的な分析対象のひとつとして、村上春樹の作品及び受容史を取り上げ、他ジャンルやメディアとの相互関係の究明を含む、新たな村上春樹研究となった。とりわけ、村上春樹受容の側面に着目したことで、視覚メディアも含め多様なメディアが村上春樹の影響下にあることが明らかとなり、それらメディアの「文学」共同体の約束事や枠組みの様相を浮かび上がらせることができた。このような視点は、先行研究においては、村上春樹の反政治性、社会性の側面に分析の焦点が収斂されてきたために、注目されることはなかった視座であり、村上春樹の小説を、70年代の政治闘争の終焉と80年代以降の社会の心理学化に呼応して人気を博した現代日本文学を代表する作家として位置づけ文学史を再構成し、村上春樹を軸にして、今日の自己認識や社会に対する認識が何を根拠にどのように作られてきたのかを問い直すことが可能となった。

(5) 文学研究とメディア研究は村上春樹研究を結節点にして方法的に統合化され、文学とサブカルチャーの歴史的交渉関係を村上春樹がデビューする1979年から今日までの長期的なスパンで記述することができた。さらに、分析概念の精緻化によって、文学とサブカルチャーの多様なジャンルを、それぞれのジャンルの特殊性や特異性を切り捨てることなく、その差異を明らかにしながら同時に分析する視座を手に入れることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計25件)

- 押野武志、日本におけるミステリとハードボイルド受容、層：映像と表現、査読有、6号、2013、72-84
- 横濱雄二、谷川流『涼宮ハルヒの憂鬱』シリーズにおける物語世界の構成、甲南国文、査読無、60号、2013、271-286
- 西田谷洋、家族愛とテロリズムの美的イデオロギー『輪るピングドラム』、国語国文学報、査読無、71集、2013、1-12
- 西田谷洋、虚構のモラルティー 村上春樹「納屋を焼く」論、国語国文学報、査読無、70集、2012、84-96
- 西田谷洋、「踊る小人」の近代、国語国文学報、査読無、70集、2012、73-82
- 西田谷洋、翻案としての地域/テキスト『花咲くいろは』を読む、イミタチオ、査読無、54号、1-14
- 押野武志、初期江戸川乱歩論「一枚の切符」・「二銭銅貨」の射程、層：映像と表現、査読有、5号、2012、104-121
- 横濱雄二、動く水 宮崎駿における原形質性と可塑性、層：映像と表現、査読有、5号、2012、42-58
- 横濱雄二、地図で読む野坂昭如「火垂るの墓」 コンテンツと地域表象、甲南女子大

学研究紀要、査読無、49号、2012、17-24

千田洋幸、ポップカルチャーとジェンダー・スタディーズの行方、日本近代文学、査読有、85集、2011、95-101

千田洋幸、キャラクターの実存をめぐって 初音ミク、そして「ミクの日感謝祭」という出来事、F、査読無、8号、2011、47-58

〔学会発表〕(計27件)

- 押野武志、ポピュラー音楽の賢治、宮沢賢治学会イーハトーブセンター冬季セミナー、2014年2月22日、大妻女子大学(東京都千代田区)
- 横濱雄二、1970年代の『本陣殺人事件』映像化作品について、第2回現代日本映画文学 相関研究会、2013年12月7日、立命館大学衣笠キャンパス(京都府京都市)
- 千田洋幸、西田谷洋、横濱雄二、現代日本のミステリの広がりと問題系、テキスト研究学会第13回大会シンポジウム、2013年8月30日、甲南女子大学(兵庫県神戸市)
- 千田洋幸、西田谷洋、竹本明寛秋、現代日本文学とサブカルチャーの交錯、本科研国際シンポジウム、2012年12月15日、北海道大学(札幌市)
- 竹本寛秋、インターネット上の詩はどのように規定されてきたか 投稿詩サイトを中心に、日本文学協会・第32回研究発表大会、2012年7月1日、長野県短期大学(長野市)
- 竹本寛秋、日本のコンテンツ産業の現在と、ゲーム制作の現場、北海道工業大学メディアデザイン学科特別講演会、2011年12月19日、北海道工業大学(札幌市)
- 横濱雄二、複数の作品か、複数の媒体か メディアミックスについて、北海道国語国文学会・平成23年度大会、2011年7月2日、北海道大学(札幌市)

〔図書〕(計10件)

- 西田谷洋、ファンタジーのイデオロギー 現代日本アニメ研究、ひつじ書房、2014年5月予定、頁数未定
- 千田洋幸、ポップカルチャーの思想圏 文学との接続可能性あるいは不可能性、おうふう、2013年、206頁
- 押野武志、諸岡卓真(共編)、日本探偵小説を読む 偏向と挑発の文学史、北海道大学出版会、2013年、293頁
- 千田洋幸、宇佐見毅(共編)、村上春樹と1990年代、おうふう、2012年、334頁
- 西田谷洋、浜田秀(共編)、認知物語論の臨界領域、ひつじ書房、2012年、97頁
- 西田谷洋、五嶋千夏、野牧優里、大橋奈依(共著)、メタフィクションの圏域、花書院、72頁

6. 研究組織 (1) 研究代表者

押野 武志 (OSHINO, Takeshi)
北海道大学・文学研究科・教授
研究者番号：70270030

(2)研究分担者

千田 洋幸 (CHIDA, Hiroyuki)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：40251566

西田谷 洋 (NISHITAYA, Hiroshi)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：70378230

横濱 雄二 (YOKOHAMA, Yuji)
甲南女子大学・文学部・講師
研究者番号：40582705

竹本 寛秋 (TAKEMOTO, Hiroaki)
鹿児島県立短期大学・文学科
研究者番号：20552144